

全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会の開催・廃止過程 — 第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまで —

A Historical Study about the Noto Peninsula Ekiden for Selected Japanese Universities during 1968- 1977

大久保 英 哲, 親 谷 均 二
Hideaki OKUBO, Kinji OYATANI

〈要旨〉

第1回開催(1968)から第10回大会(1977)まで行われた「全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会」(「能登駅伝」)は、かつて日本大学三大駅伝と言われた大会であった。能登半島の国定公園指定を機に、富山県高岡市を出発、能登半島を3日間かけて1周し、金沢市でゴールするという大規模な駅伝であった。しかし、この駅伝は10年間でその幕を閉じてしまった。

本論文では、第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまでの当時の大会要項、会計報告、パンフレット、大会関係者、参加選手へのインタビュー、新聞記事などの資料をもとに、この大会の実施状況を検討し、大会の開催から廃止に至る過程を明らかにする。

「能登駅伝」は、昭和43(1968)年能登半島が国定公園に指定された記念事業として、七尾市及び読売新聞社によって発案された。読売新聞社は交通事情や都市環境の悪化により、自らが主宰してきた「青東駅伝」、「箱根駅伝」が将来的に実施困難となる可能性を見据え、それに代替する駅伝大会として育てる意図があったものと見られる。そしてそれは昭和45(1970)第3回大会から「三大駅伝」と呼ばれるまでに成長したことで実現された。

しかしながら、昭和48(1973)年10月のオイルショック以後、物価が急騰、大会運営を直撃した。大会主催者は選手監督の旅費・宿泊費などを減額、廃止することで対応したが、読売新聞社ほかのスポンサーが補助金を減額ないし打ち切ることにより、大会は資金的に行き詰り、廃止されるに至った。

〈キーワード〉

能登駅伝, 駅伝競走, 開催過程, 廃止過程

はじめに

駅伝は現在、地域で行われる小規模の大会から国際大会まで、さまざまな形で行われ、*Ekiden*として世界各国で通用する。

2015年現在、男子大学生の三大駅伝と言われているのは東京箱根間往復駅伝競走(以下「箱根駅伝」)、全日本大学駅伝対抗選手権(以下「伊勢駅伝」)、出雲全日本大学選抜駅伝競走(以下「出雲駅伝」)である。これらはいずれもテレビ放映されているが、特に「箱根駅伝」は関東学連の地域大会であるにもかかわらず、正月の恒例行事として人気が高く、2015年1月の第91回大会は往復平均28.3%と高い視聴率を誇っている⁽¹⁾。

しかし1970年代まで男子大学生の三大駅伝といえば、「箱根駅伝」、「伊勢駅伝」、それに「能登駅伝」を指した⁽²⁾。

「能登駅伝」は正式には「全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会」といい、1968年に富山県高岡市をスタートし、七尾市をゴールとする大会として始まった。後、1970年の第3回大会からは、高岡市からスタートし、能登半島を3日間かけて襷をつなぎ、金沢市でゴールするという文字通り能登半島を1周するコースに延長され、大規模な駅伝となった。最も参加チーム数が多かった第10回大会(1977年)は、12チームが参加し、順位は、1位日本体育大学、2位東京農業大学、3位大東文化大学、4位京都産業大学、5位中京大学、6位東海大学、7位駒沢大学、8位大阪体育大学、9位東北学連、10位北信越学連、11位大阪商業大学、12位北海道学連、であった。九州学連は九州一周駅伝が11月上旬から中旬にかけて行われていたため、「能登駅伝」には第6回大会しか出場していない。なお、

中国四国学連は、第10回大会には参加していないが、第1～3回、第5～9回大会に参加しており、「能登駅伝」の常連チームであった。このように「能登駅伝」は文字通り、日本全国の大学生たちが集まる大学駅伝だったのである。だが、1968年（第1回）から1977年（第10回）まで、10年間にわたって行われたにもかかわらず、その後廃止されて今日に至っている。

『日本陸上競技連盟七十年史』⁽³⁾によると、「能登駅伝」は「箱根駅伝の練習を兼ねて関東の各大学と関西、北海道、東北などの大学が参加。全日本大学駅伝対抗選手権もあって、第10回1977年で終了」とごく簡単に説明されているにすぎない。継続されたとするならば、2017年に50回を迎えたであろう「能登駅伝」についての先行研究は、東木⁽⁴⁾、鈴木⁽⁵⁾、と数も少なく、その全体像はほとんど知られておらず、「幻の駅伝」となっている。そこで、本稿では、先ずこの大会の様子を第1回、第3回、第7回によって簡単に把握しつつ、第1回大会開催に至る背景、第10回で廃止に至った過程を明らかにする。なお第1～10回大会毎の詳細な実施記録、選手名、順位、タイム等については紙幅の都合上、他日を期したい。

主な資料は第1～10回大会要項、予算・決算書、議事録、第1～6回大会総務を務めた宮口尚義氏、第7～10回大会総務を務めた東木美憲氏へのインタビュー記録、さらにこの2～5回大会に4度北信越チーム代表選手として能登路を走り、さらには第5・9回大会に北信越チームの監督として伴走車に乗り込んだ経歴を有する筆者の一人親谷均二のメモのほか、大会の主催ないし後援企業であった読売新聞社が北陸版に報じた新聞記事およそ60点である。

1. 「能登駅伝」大会の発案

昭和43（1968）年5月1日、能登半島が国定公園に指定された。能登半島国定公園は能登半島の海岸線はほぼ全域にわたる海洋自然公園であり、指定区域は当時の石川県4市12町、富山県2市に及んでいた。公園内の景観を地域的に見ると、石川県側では、日本海側に面した、通称外浦と呼ばれる本島北西海岸部と、富山湾に面した、内浦の南東海岸部の2地域に大別される。

当時金沢大学の体育学教官であり、後に第1～6回大会総務を務めることになった宮口尚義氏はインタビュー⁽⁶⁾で次のように語っている。

「能登半島が国定公園指定になった記念行事と能登半島国定公園のPRとして、七尾市観光協会と読売新聞が大学生の駅伝大会を発案し、私（宮口氏のこと：筆者）に開催を依頼してきた。『全日本学生招待 能登半島一周駅伝競走大会』として、企画・運営は金沢大学陸上競技部の学生を中心として北信越の大学の学生が行い、準備は半年前か

ら行った。1回の記念行事で終わる予定だったが、読売新聞社からすばらしい駅伝だから今後も続けてほしいと依頼され、以後、『全日本大学選抜 能登半島一周駅伝競走選手権大会』と名前を変え、毎年行われるようになった。」

これによれば、「能登駅伝」は、当初、能登半島が国定公園の指定を記念する単発的な行事として企画され、能登に観光客を誘致するためのPRとして、七尾市と読売新聞社が発案したものである。能登半島第一の中心都市七尾市観光協会国定公園指定記念PR事業として発案したことは理解できるが、読売新聞が主催者として駅伝大会を提案してきた背景には何があったのだろうか。

これは、第1回大会開会式で挨拶に立った森田善十読売新聞北陸支社長の「青森、箱根駅伝のような伝統ある大会に育てていきたい」⁽⁷⁾、第3回大会開会式における鮎田読売新聞北陸支社長の挨拶「能登駅伝も回を重ね、各方面の注目を集めている。駅伝は、交通渋滞のひどい大都市周辺から締め出される傾向にある。それに比べ能登駅伝は、景色よし、空気よしと環境は満点。しかも、今回から北陸の古都・金沢市がゴールになり、地元民の期待も一段と高まっている」⁽⁸⁾、さらに第5回大会を前にした読売新聞PR版にその理由を見出すことができる。

読売新聞PR版昭和47（1972）年11月号は「三大駅伝に成長」との見出しの下、「正月の2日間、東京一箱根往復コースで行われる伝統50年の名物レース、箱根駅伝は、首都圏の過密と爆発寸前の交通事情から、現状のままでの存続が困難になり始めている。一方、伊勢駅伝は、1日レースのために駅伝特有のドラマティックな盛り上がりには乏しいという声が強い。これらの事情を考えると、それこそ能登駅伝は学生駅伝の1枚看板になると言っても過言ではない。」⁽⁹⁾と述べる。

第1回大会開会式の挨拶に出てくる「青森」（駅伝）とは、1950年から読売新聞社が主催していた「東日本縦断駅伝」（青森・東京の頭文字をとって「青東（あおとう）駅伝」を指すと思われるが、国道4号線の交通事情の悪化から、年々実施が困難になっていた。（実際、1971年の21回大会から秋田・山形経由にコース変更、さらには1974年の24回大会を最後に休止に追い込まれた。）また同じ読売新聞社が主催していた箱根駅伝も首都圏の過密と爆発寸前の国道1号線の交通事情から、現状のままでの存続が困難になり始めているとの認識があったものと見られる。

かつての読売新聞社社主正力松太郎（1885-1969）は、周知のごとく、富山県高岡中学から金沢の第四高等学校に進んだ人物であり、富山・金沢・能登半島にはゆかりの深い人物であった。1967年には報知新聞社社主に就任しており、読売新聞北陸支社前が「能登駅伝」のスタート地点とされたのはただ単に地理的な利便性からのみではなかった

と考えられる。いずれにしても、「駅伝の読売」⁹⁾を自負する読売新聞社サイドは、主催する「箱根駅伝」ないし「青東駅伝」に代わる新たな駅伝を模索していたものとみられる。前述宮口尚義氏は、「箱根駅伝は交通渋滞、大気汚染の悪化でまもなく実施ができなくなる。それに代わる能登駅伝を」との説明を受けたと明言している⁶⁾。

したがって、七尾市側は国定公園指定記念行事として、能登半島国定公園のPRのための単発行事として構想したかもしれないが、読売新聞社側は最初から「青森、箱根駅伝のような伝統ある大会に育てていきたい」(前述⁷⁾) 森田善十読売新聞北陸支社長第1回大会挨拶) との中・長期的な見通しがあったのではなかったかと思われる。

2. 第1回大会(昭和43年)の成功

昭和43(1968)年11月14-17日、「全日本学生招待 能登半島一周駅伝競走大会」が開催された。大会要項によれば、主催は「北信越学生陸上競技連盟・読売新聞社」であり、後援には石川県、富山県のほか、高岡市、七尾市など能登半島22市町村が名を連ねている。

参加チームは各地区学生陸上競技連盟から10チームが招待されたが、参加したのは九州地区を除く9チームであった。九州学連は11月上旬から中旬にかけて行なわれていた各県対抗の九州一周駅伝(高松宮賜杯・西日本各県対抗九州一周駅伝大会)¹⁰⁾との日程調整がつかなかったものとみられる。

コースは、第1日目に高岡市読売新聞社北陸支社前をスタートし、北國銀行能都支店前まで。第2日目は北國銀行能都支店前から輪島市役所前まで。そして第3日目は輪島市役所前から七尾市役所前でゴールという計24区、全長345.9kmのコースであった。レースの様子は連日、読売新聞に次の様に報じられている。

「郷土代表、北信越選抜チームは全員よく健闘、力走したが、全日本のレベルは高く、初日は8位にとどまった。初日の第一走者、中村文夫選手(信州大)は、青色のたすきを左肩からかけ、元気よくスタートした。7位で第二走者・小笠原和弘選手(信州大)にリレー。小笠原選手は後半疲れ、最下位の青山学院・服部選手に追いつかれ、肩を並べて第三走者、折橋勉選手(金経大)へ。折橋選手は前半青山学院と競り合いながら東北選抜に肉薄した。しかし、後半になって青山学院に振り切られ、東北選抜にも約5km競り合った末、離され8位に。しかし第四走者、ベテラン吉田祇生選手(新潟大)は次第に遅れ始めた茨城大・青木選手を抜き、7位に上がり、東北選抜との差も縮めながら第五中継点へ。だが、トップとの時間差が20分開くと、次走者が中継点からタッチなしに再スタートする規定があるため、第五走者・松本稔選手(金大)は十数秒差で再スタート組になり、茨城大、中・四国選抜とともに第五

中継点から再スタートした。松本選手は今春痛めた胸部の傷が痛み出して再スタート組の最下位で第六走者、堀田宗明選手(大谷技短大)にタッチ。堀田選手は先月の富山県・魚津一字奈月間駅伝で5人抜きをした自信で飛ばし、東北選抜を抜いて第七走者、水谷俊雄選手(福井大)へ。水谷選手は前半飛ばしすぎ、後半第八中継地にあとわずかというところで東北選抜に抜かれた。しかし、よく最後まで頑張り、倒れながら最終走者、加藤孝一選手(福井大)にタッチ。よく力走したが8位にとどまった。』¹¹⁾

「2日目は、冷たい雨、風がたたきつける悪天候であった。北信越選抜は齊藤喜八郎主将(福井大)を20.4kmという今駅伝最長の区間に起用し、5位で松本選手にタッチした。松本選手はスタート直後に、激しく追いつけてきた大阪商大にいったん抜かれたものの、4kmすぎの珠洲市・木島バス停あたりで青山学院を抜き、上戸農協付近(9.4km)で大阪商大をとらえ4位に上がる大活躍。3番手の寺沢文雄選手(信州大)は本降りになってきた雨にペースがくずれたかスピードに乗り切れず6位に落ちた。続く新人、平塚光明選手(金沢大)・矢作富雄選手(信州大)はよく健闘したが、トップとの時間差が15分以上ひらいたため6番手の森泉哲選手(信州大)は東北選抜、中・四国選抜、茨城大とともに繰り上げスタートした。森泉選手は中・四国選抜、茨城大を大きく振り切り、最終ランナー木村テツ選手(新潟大)へ。木村選手も力走したが、順位は変わらなかった。佐藤監督は「なんとでも入賞したい。そのために最終日の今日はベテランばかりを配置した。必ず郷土ファンの期待に応えます」とファイトを燃やしている。』¹²⁾

「最終日、北信越選抜チームは全区間にベテランを配置し、入賞を狙った。しかし、1・2番手が向かい風に負けてブレーキとなり、19、21、24区で繰り上げ出発。後半の追い込みもむなしく、惜しくも通算7位で入賞を逃した。だが、選手たちは、日本の一流ランナーと初めて戦い、非常に有意義だったと大喜び。来年の健闘を誓って、それぞれ帰路についた。佐藤国治監督は「入賞を逃したことは残念だが、さすがに日体大、東洋大、中京大などは日本一流の名の通りだ。精一杯やったのだから悔いはない。学ぶことも多かった。来年は金大で単独チームを作り、まずは東北選抜チームを抜いて入賞したい」と語った。』¹³⁾

また読売新聞運動部星野記者は、大会を振り返って次の様にコメントしている。

「コースの不案内、天候の急変など懸念された点もあったが、9チームの若々しい闘志がこの心配を完全に吹き飛ばし、見事な収穫をあげたのは幸いだった。全国でも数百あるといわれる大小駅伝の中で、この大会のコースほど上り下りの坂道が多いものはないだろう。新しい駅伝のあり方として、長距離・マラソン走者の訓練過程といった面から



写真1. 第1回「能登駅伝」最終日記事
(読売新聞, 昭和43年11月18日)

も大会の将来性は極めて明るい。欲を言えば時期的な問題点が今後の課題。天候の変化などを考えて、もう少し会期を繰り上げれば、正月に控えた関東大学駅伝の練習に100%取り入れられようし、温暖な地域から参加するチームのためにもなると思われるからだ。選手層は、上位5チームと東北、北信越選抜、茨城大、中・四国選抜がかなりかけ離れていたが、この大会が刺激となって長距離選手の数が増え、レベルが向上すればこれにまさる駅伝の意義はない¹⁴⁾

この第1回大会の公式大会要項に「第1回」の表示がないのは、当初七尾市から単発の行事として提案されたことを裏付けるものかもしれない。大会決算報書は未記入項目など不備が多いが、収入欄には読売新聞社120万円、関係市町村が132万3,000円、石川県・富山県が各10万円、計270万円ほどの予算規模であったと思われる。昭和43年の大卒国家公務員初任給が2万4,000円弱¹⁵⁾であるから、112人分。現在に換算すれば、2千万円超くらいの事業規模だったことになる。

第2回大会は、昭和44(1969)年11月21日～23日。ほぼ第1回大会と同じコース、参加チームで行われた。

第3回大会はゴールが七尾市から金沢市に変更され、以後定着した大会であるため、やや詳しく検討する。

3. 第3回大会(昭和45年)におけるコース変更

第3回大会は、昭和45(1970)年11月21日～11月23日の3日間行われた。大会要項によれば、主催は北信越学生陸上競技連盟、読売新聞社、後援は日本学生陸上競技連合、石川県、富山県、関係市町村、主管は石川陸上競技協会・富山陸上競技協会であった。第1・2回大会は能登半島観光協会が後援したが、第3回からは外れている。

第1・2回大会から変わったのは、第1日目のゴールが能都町から珠洲市まで延びたことと、第3日目に金沢市が決勝点になったことであった。これまでは、羽咋市から現在の中能登町を経て七尾市に向かったが、新コースは、羽咋—高松—津幡—森本—金沢になった。これによって、文字通り能登半島一周になった。読売新聞は「内浦から外浦へ、海あり山ありの絶景の間に延びる能登登路。『起伏、

景色に富んだコース。全国を捜し歩いてこれだけすばらしいところはない。全くすばらしい』。参加した選手、監督は口を揃えてこう言う。第1日目の鏡のような水面、海というより湖を思わせる内浦沿いに進むコース、第2日目の岩に砕ける波を眼下に見下ろす外浦のコース、第3日目の能登金剛をはじめ、全国に誇る景色、そして、今年は百万石の城下町・金沢が加わる。重要文化財・石川門での「全国的な駅伝大会でありながら、従来そのコースに入っていなかった金沢市が各方面の尽力で今年から新しくコースに入り、うれしい。」¹⁷⁾との徳田与吉郎金沢市長の談を載せている。こうしたコース変更について、前述宮口氏は「読売新聞社は高岡市にあるため、金沢ではあまり購読されていなかった。そこで北國新聞に対抗しようと宣伝をかねて金沢に伸ばした」と背後に購読者数獲得争いがあったのではないかと語っている¹⁸⁾。読売新聞北陸支社版の新聞発行部数は「能登駅伝」第1回大会(昭和43年)18万1,903部、第2回大会(昭和44年)19万6,550部と5,000部ほど増えたが、金沢をゴールとした第3回大会(昭和45年)には19万641部と6,000部減ってしまった¹⁹⁾。これだけでいえば、部数拡張には結びつかなかったことになる。

また金沢市は戦災に遭わなかった城下町のため、道路事情が悪く、当時大会秘書をしていた東木氏は、「金沢市内を走ることにについてはなかなか(警察の)許可が出なかった。そのためなるべく車通りの少ない裏道をコースにした」²⁰⁾と述べている。

また第3回大会は、石川陸協、富山陸協主管で実施されたが、これは、これまで伴走車を提供していた陸上自衛隊が訓練の都合で支援活動を取り止めた(陸上自衛隊第14普通科連隊がこの大会に再び支援を始めた記録が見られるのは第6回大会以後)ため、伴走車にレンタカーを借り上げ、金沢大、金沢経済大、金沢工大の3年以上の陸上部員がドライバーを担当した。さらに「毎年継ぎ点の確認のために距離を測定していたが、測定の誤差があるのではないかと出場校からの批判を受けた」²⁰⁾とコース変更に伴う労力の増大に苦慮した様子を語っている。また、伴走車から学生



写真2. 「紫紺の大優勝旗 稲置連盟会長が寄贈」
(読売新聞, 昭和47年11月PR版(日付なし))

が転落するなど、安全面の管理ができていないという指摘が警察からあったとの報告もあり、大会運営の準備や運営負担が従来以上に増加したことを意味していた。読売新聞も「能登駅伝 各地の準備OK」との見出しで、準備にでてこ舞いしている「裏方さん」の模様を報じている²¹⁾。

コースが変更になったこの第3回大会の第3日目の様子について、読売新聞は次のように報じている。

「大会最終日とあって、スタートから緊張したムード。北西の風4～5m、最低気温6.1℃とあいにくのコンディションながら、午前4時には早くもランニング姿で市内を軽く走り、体調を整える選手もあって、各チームとも「最後にかける」の強い意気込み。

出発5分前、宮口大会総務（石川陸協常務理事）が各チームの点呼を取ると“必勝”を期した第一走者の表情が引き締まる。スタートの号砲とともに「頑張れよ」の声援を受けた選手たちは一路金沢市のゴールを目指した。

初日で7分42秒の差をつけながら、2日目に中京大に21秒縮められた日体大は、温存していた小沼、高橋、田中など、10000m29分台のトップ・ランナーを次々に起用。食い下がる中京大、駒沢大などを寄せ付けなかった。この作戦が図に当たり、第一走者久宗が8.2km（16区）の短い区間にも関わらず、2位以下に約500mの差をつけて早くもリード、続く小沼、高橋もそれぞれ区間最高をマーク、中京大を約2kmも引き離し、レース前半で3連勝を決めてしまった。後半の興味は、これまでの2位との通算の“時間差”13分9秒を更新できるかにかかった。前日までの時間差は7分21秒。あと5分49秒で更新できる計算となったが、スタートから走者がじりじり差を広げ、20区で小菅が中京大・畠中に2分4秒の差をつけ、あっさり“新記録”を作った。その後も岩淵、田中、山口、石倉が次々区間最高で快走、結局15分53秒の大差となった。

2日目ゴール間近で日体大を追い抜き、氣勢があがる中京大は、起伏の激しい16区に、3000m障害物に9分そこそ

この記録を持つ山下を起用、スタートから飛び出す作戦。山下はよく力走したが、的場がブレーキとなり、駒沢大・田中に抜かれて3位に転落、19区の長丁場で3日連走ながら3たび区間最高を出した新人の市の健闘もむなしく2位で終わった。2日目まで4秒差で3位を争っていた駒沢大と大阪体育大も、それぞれ苦心のオーダーを組み、お互いにマークしながら力走したが、田中、大沢、佐藤ら10000mに30分台の実力を持つ選手をぶつけた駒沢大の作戦が的中、3位となった。

北信越学連チームは、この日後半戦で激しい追い込みを見せたが、前半戦の不振がたたわり8位、3日間の通算成績では9位に終わった。この日の第一走者（16区）寺沢（信州大）は、スタートから力強いストライドでピッチを上げ、上位集団に混じってよく走ったが、輪島市街地のはずれ、8km地点から遅れ、上縄又中継点では最下位で親谷（金沢大）にリレー。2日目のレースで大きなブレーキとなった親谷は、汚名挽回を期してスパート、4km地点の上り坂で茨城大の久田を抜く好走。全コースを通じての最長区間19区（20.3km）で大塚（信州大）が痙攣を起こして最下位に転落した。22区で白崎（福井大）が巻き返して9位に上がったが、続く23区の佐藤（金沢大）が再びブレーキとなり、後半の齊藤（福井大）、平塚（金沢大）の活躍も及ばず、上位には食い込めなかった。」²²⁾

4. 第3回大会（昭和45年）予算・決算書

この第3回大会の予算・決算書を見てみたい（千円以下切捨）。決算収入は、読売新聞社が107万円（予算段階では120万円）、関係市町村が100万5,000円、石川県15万円、富山県5万円、広告料67万6,000円、学連補助金4万円、計299万1,000円であった。これに対して、支出は準備費として旅費7万7,000円、会議費4万円、ポスター等需要費17万6,000円、表彰費13万円等計44万円。大会費は、宿泊費（10チームの選手・監督・運転手）108万円、同じく旅費が89万円、ほかに選手輸送費、強化費、中継点謝礼費など支出合計は294万1,000円となっている。この中には次回大会のための準備金2万円が含まれており、ぎりぎり赤字を回避する経費で運営されていたことがわかる。大会関係者東木氏は「広告集めは学生や新聞社が行っていた。広告料が増え、その年が黒字になりそうだと、読売新聞社が予算案よりも出資する額を減らした。」²³⁾と後に述べているが、第3回もそうであったかもしれない。なお、この当時5～10%と年々物価が上昇していた。例えば第3回大会時（昭和47年）の大卒国家公務員の初任給は4万5,300円であったが、第7回大会時（昭和49年）にはほぼ7万円に上昇している¹⁾。



図1.「第3回大会 走路図」

5. 第7回大会（昭和49年）

第7回大会は昭和49(1974)年11月22日～11月24日。主催は北信越学生陸上競技連盟，読売新聞社，報知新聞社，後援は，日本学生陸上競技連合，石川県，富山県，関係市町，主管は，石川陸上競技協会，富山陸上競技協会であった。

参加チームは，北海道選抜，東北選抜，北信越選抜，日本体育大学，順天堂大学，大東文化大学，東京農業大学，中京大学，大阪体育大学，大阪商業大学，京都産業大学，中・四国選抜の12チーム，順天堂が初出場であった。

第1日目の大会のようを読売新聞は次のように報じている。

「第1日目は青空がのぞいたかと思うと，激しい曇りが降り出すという猫の目のように変わる荒天に見舞われ，選手にとっては悪コンディションとなった。1区は伏木に入る4km地点までほぼ一団となって通過。氷見市内に入る頃には，混戦から松本（大東文化大），小倉（順天堂大），中村（日体大）が抜け出してトップグループを作り，約30m遅れて小菅（東京農大），田中盟（中京大），藤田（大阪体育大）が追走。地元北信越学連の堀はペースを乱し，スタート後5km地点で，角谷（京都産業大）から150m遅れて最下位になり，苦しい戦い。

2区は，東京農業大頼みの切り札，服部が両足を跳ね上げる独特なフォームで期待通りの力走。中継後，次々に4人を抜いて9km地点の氷見市大境でトップに立ち，約300mリードして3区の藤本へ。3区では，先頭グループの東京農大，日体大，大東文化大，順天堂大，中京大と大阪体育大以下の各チームとの差が1km以上でき，首位争いは上位5校に絞られた。5区に入り日体大は，エースの高橋が好走。中間点では一時，山岡（東京農業大）に100mの差を付け，52分20秒の好記録で穴水中継所へ。山岡も後半追い込み，同タイムで第6区へ引き継いだ。第6区の穴水一上曾山からは，青空がのぞく時間も長くなり，波静かな能登内浦を右手に，コンディションはやや上向き。6区では東京農大に1秒差で再び首位を譲った日体大は，7区の塩塚，9区の日下，最終10区の北中と若手がそろって区間最高，区間新記録を立て，「完全にペースに乗って走った」（岡野監督の話）という活躍ぶりで7区以降，首位を堅持した。7区まで日体大と競り合った東京農大は，福田（8区），壺岐（9区）がややブレーキを起こして後退。10区で，それまで順天堂大と3，4位争いを演じていた大東文化大が大久保の区間新記録の大奮闘で，東京農大に20m差を付けてゴール。順天堂大も東京農大へ47秒差と追い上げ上位に食い込んだ。中京大は，首位日体大に10分以上の差をつけられ，2日目以降のレースをやや苦しくした。このほか大阪体育大，東北学連，大阪商業大，中・四国学連，北海道学連の各チームは，それぞれ昨年大会の1日目合計

タイムを上回る健闘をし，北信越学連は伊藤，高木らの後半の踏ん張りで11位に滑り込んだ。」²³

第2日目の大会のもようである。

「朝のうち雲の多かった空模様も，正午近くには晴れ間も出る駅伝日和に，各選手は，内浦から外浦をひた走り，2日目のゴールの輪島市へ向け，快調にとぼした。この日は祝日と重なり，沿道では家族ぐるみで力走する選手に声援を送る姿が目立ち，駅伝ムードは急激に盛り上がった。珠洲市役所をスタート後，レース展開は1日目同様，日体大，大東文化大，順天堂大，東京農大の先頭グループに，やや遅れて中京大が続き，この後を東北学連，大阪商業大，大阪体育大などが追う形になった。混沌とした首位争いは，12区に入ると，服部（東京農大），浅田（日体大）が先頭に並んで競り合い，3km地点では服部が快走。2位以下を引き離れた。大東文化大・塩野も中間点を過ぎるあたりで，順天堂大・新原を抜いて浅田を追い上げ，狼煙の中継点は東京農大，大東文化大，日体大，順天堂大の順で通過した。13区は，3日間の全区間を通じて最も難しいラケット道路が区間中央にある。大東文化大はこの難区間に経験者大久保を起用した。大久保は上り，下りの急坂や急カーブを，平地のように軽い足取りで突っ走り，区間新記録でトップに立った。東京農大は，小野寺のブレーキで日体大，順天堂大にも抜かれ4位に転落。12区での服部の貯金を帳消しにした。大東文化大は，14，15区も阿部，竹内が大久保に負けないスピードに乗った走りを見せ，「欲を言えば13，14，15区の3人にもう1つの伸びがほしかったが，まあ上出来のほう」（青葉同大監督）という予想通りの活躍で，日体大を大きく引き離して2日目のゴール。日体大は「5人とも自分の力を十二分に出した。2位になったのは，大東文化大が速すぎたため」（岡野同大監督）。しかし，この結果，トップの座を降りることになり，東京農大，順天堂大は首位との差を縮めることができないまま，最終日に望みを託した。中京大は高橋，中瀬ら若手の活躍で5位を確保。1日目11位の地元北信越学連は，菊池らの力走にもかかわらず，12位。通算で北海道学連より1分16秒上回るだけで，最終日の奮起が期待される。

第2日目は，前年同様，大東文化大がトップに立ち，通算でも1位に浮上した。13区はラケット道路と呼ばれるアップダウンやカーブが多いところがあり，経験者を使うチームが多かったようだ。」²⁴

第3日目の大会のようを読売新聞は次のように報じている。

「大東文化大は，輪島市役所をスタート後，16区の塩野，17区の竹内と連続で大阪体育大，東京農大にトップに譲った。続く18区でも，松本が日体大・荒野の追撃を許し，やや苦しい出だし。しかし，「今日は3日間通じてのベストメ

ンバー。一気に差を広げる」(青葉同大監督)と、同大が自信を持ってのエントリーだけに、19区のエース大久保から徐々に地力を発揮。大久保は中継後、真正面から吹き付ける強風をものともせず、スパート。1km地点では、日体大・竹林を抜いて2位に上がり、中間地点では1位の東京農大に200mと激しい追い上げを見せ、20区の鞭馬に引き継いだ。鞭馬は中間地点手前で東京農大・山本を捕らえ、起伏の多い山道を快調に飛ばして区間新記録を樹立。50mリードして志賀町直海の中継点へ入った。この結果、大東文化大は大久保、鞭馬の好走で日体大に3分31秒の差を付け、首位固めの体制に入った。その後も、区間を重ねるごとに焦る日体大との差は開くばかり。日体大は20、21区の和田、関口が頑張りを見せたが、23区で塩塚が区間8位に落ちるとい、思いがけないブレーキを起こすなど、苦戦。終盤の関(24区)、石井(25区、区間新)、高橋(最終区)の力走も実らず、「3日間通じて大東文化大・大久保、東京農大・服部など他校のエース級に大差をつけられたのが痛く、エースを持たない弱味が敗因」(岡野同大監督)という結果に終わった。今大会初出場コースに不案内というハンデを背負った順天堂大は、最終日だけのタイムでは大東文化大に次ぐ2位になり、通算でも3位と大健闘。上位の順位争いを面白くした。このほか東京農大は最終日も服部が活躍。通算4位の原動力になり、下位では、最終日の16区で高岡が区間1位を奪った大阪体育大の奮起が目立った。』²⁶⁾

能登駅伝の閉会式は、レース終了後の24日午後4時から金沢市出羽町の金沢女子短大講堂で行われ、優勝旗が稲置繁男北信越学生陸上競技連盟会長から大東文化大の竹内譲二主将にしっかりと手渡された。続いて1日目から3日目までの優勝チーム、区間優勝者、監督に賞が贈られた。坂井敏夫審判長の講評、林勝次富山大学長、渡辺金行日本学生陸上競技連合会幹事長の祝辞の後、木村一義読売新聞北陸支社長が『来年もまた選手の皆さんと再会しましょう』と述べ、大会を締めくくった。』²⁷⁾

6. 第7回大会以降の運営の行き詰まり

入手した予算・決算書は、第2、8回大会の資料そのものが欠落しているほか、記入漏れ等の不備も多く、正確には把握しえない。監査報告等も記録がなく、おそらく学連会計係の非公式な記録であろうとみられる。

大会事業の決算支出総額(概算)は、第3回大会294万円、第4回大会344万円、第5回大会340万円、第6回大会357万円、第7回大会370万円、第9回大会354万円、第10回大会は255万円であった。

収入は、第7回大会を例にとると、読売新聞社が最大のスポンサーで150万円、関係市町村130万円、広告料53万円、石川県20万円、富山県7万円、報知新聞社1万円、計

361万円であった。即ち、収入361万円に対して370万円の支出であるから、9万円の赤字であったことが分かる。

もちろん第7回大会の運営にはさまざまな工夫が凝らされていた。支出の中で最も大きな費目は、選手監督役員の宿泊費、旅費、移動費であり、第1回から第6回目まで、宿泊費および旅費は17名分、4泊分を援助していたが、第7回大会では、物価高騰を理由に宿泊費を3泊分の援助のみとしている。そのため、最終日の競技終了時間を1時間繰り上げ、近距離(関東、東海、関西)チームは当日帰省可能となるようにした²⁸⁾。

その後、第8回大会では、宿泊費は第7回と同様だが、全額援助していた交通費を17名分の半額としている²⁹⁾。

第9回大会以降、大会本部は宿泊費および旅費の援助ができなくなり、全額自己負担になった³⁰⁾。

第9回大会時にはすでに大会開催が危ぶまれたようである。昭和51年11月6日付けの北信越学生陸上競技連盟・稲置繁男会長から報知新聞社宛て提出されたとみられる「後援願」(案)³¹⁾を見てみよう。

「例年読売新聞社とともに貴社にも共催して頂いておりましたが、ご承知の通り諸般の事情により、急遽読売新聞社に後援していただくことになりました。これに伴い、貴社にも後援していただきたく、ここに関係書類を添えてお願い申し上げます。本大会も以上の経緯のため大会開催が危ぶまれましたが、学生諸君の誠意と参加校の熱意により、継続すべき意が強く、関係各位のご協力のおかげで実施の方向へと進んでおります。今後ともご指導くださいますよう重ねてお願い申し上げます。」

大会要項を見る限り、読売新聞社は、第1回大会から第8回大会まで「能登駅伝」の主催者に名を連ね、また会計記録簿には、第1回大会120万円、第4回大会143万円、第5回大会150万円、第6回大会160万円、第7回大会は150万円に減額、第8回大会は不明(資料を欠く)、第9回大会150万円、第10回大会は50万円を拠出してきた。報知新聞社も第4回大会から主催者となり、第4回大会20万円、第5回大会20万円、第6回大会10万円、第7回大会1万円、第8回大会(資料を欠く、第9回大会は空欄のまま)と、大会資金を拠出してきた。

ところが、読売新聞社は第9回大会には主催を降り、後援に回ってしまった。報知新聞社からも同様の意向が伝えられたものと見られ、北信越学生陸上競技連盟・稲置繁男会長から「それならばせめて後援に」と懸命の要請がなされたのが上記後援願とみられる。結局、この第9回大会は主催が「北信越学生陸上競技連盟」のみとなり、後援が「日本学生陸上競技連盟、石川県、富山県、関係系市町村、読売新聞社、報知新聞社」であった。この大会に読売新聞社は例年通り150万円を拠出したが、会計記録を見る限り、

報知新聞社は空欄である。

ただ第10回大会では読売新聞社も、報知新聞社も再び主催者に復している。ただし拠出金額は報知新聞社10万円、読売新聞は50万円と前年の三分の一に減額、総収入は258万にとどまった。これにあわせて大会運営規模も縮小せざるを得ず、選手監督の旅費・宿泊費は自弁となったものと見られる。

このように、「能登駅伝」は大会経費で苦勞していたこともあって、そのため別名「手作りの駅伝」とも言われることになった。第3回大会以来、主催者の「北信越学生陸上競技連盟（稲置繁男会長）の役員、学生が、コース作りから、役員の腕章、コース案内板、各チームのたすき、旗など、すべて自前で作成、大会を運営した」⁹¹⁾。

またこうした手作りの運営は、コースの素晴らしさとも相まって、選手や各チームには好意的に受け止められていたようである。

「能登の人たちと選手の心のふれあいは一昨年も昨年も随所で見られ、心温まる思いをした。疲れきって中継所に倒れこむ選手にそっとお茶を出す婦人会のおばさん。民宿で、料金を度外視したご馳走を振舞い、選手の健康を気遣う風景。先頭からはるかに離され、ピリを走る選手にいつまでも小旗を振って声援を送る姿。素朴……、純朴な人情に触れ、『どんなに励まされたことか』と、語る選手が多かった。全国のほかの駅伝では決して見られない能登のよさであろう。能登の人たちは、今年も駅伝が来る日を指折り数えて待っていることだろう。』⁹²⁾

昭和48（1973）年10月にオイルショックが起き、石油消費量の99.7%を輸入に依存し、しかもエネルギー源の石油依存度が73%（昭和48年）になっていた日本は、先進国の中で最大の打撃を受けた。これによってインフレが進行し、特に石油製品の値上がりは横行した。こうした中で読売新聞社は2度にわたり購読料の据え置きを公表⁹³⁾したが、その影響は次第に「能登駅伝」への補助金の削減という形で現れた。

7. 第11回大会の中止

前述東木氏⁹⁴⁾によると、「能登駅伝」第11回目（1978）開催の計画はあったという。しかし大会を事実上主管する

北信越学生陸上競技連盟、石川・富山陸上競技協会の大会準備・運営や安全対策は年々大きな負担となっていたようである。選手であった著者の一人親谷は、半年前から準備に奔走する陸上競技部員たちから、「選手は練習できるからいいなあ」と羨ましがられたという。「手作り駅伝」方式の準備・運営がほぼ限界を迎えていたものと見られる。さらに、高騰する物価にともない大会運営費の増大が見込まれる中、読売新聞側がスポンサーを降りたことによって大会運営費の確保が困難に陥り、第11回大会が断念に至ったものと見られる。

結論

「能登駅伝」は、昭和43（1968）年能登半島が国定公園に指定された記念事業として、七尾市及び読売新聞社によって発案された。七尾市は能登半島観光PRとして、単発的な行事と位置付けた可能性があるが、読売新聞社は交通事情や都市環境の悪化により、自らが主宰してきた「青東駅伝」、「箱根駅伝」が将来的に実施困難となる可能性を見据え、それに代替する駅伝大会として育てる意図があったものと見られる。そしてそれは昭和46（1971）第3回大会が「三大駅伝」と呼ばれるまでに成長したことで実現された。

「能登駅伝」は、当初高岡市読売新聞社前をスタートし、七尾市をゴールとするコースで開催されたが、第3回大会から金沢市をゴールとするコースに変更された。しかしこの金沢市をゴールとするコース変更は都市交通の悪化問題に直面させ、大会運営の困難度を高めることにつながった。また能登半島は国定公園指定以後、大規模な道路改良工事が行われたため、しばしばコースの迂回や変更などを余儀なくされ、大会運営を難しくした。大会運営は北信越大学陸上競技連盟が「手作り」で当たっていたが、大会運営の不慣れに批判も見られた。即ち大会運営組織の合理化・強化が必要であったとみられる。

昭和48（1973）年10月のオイルショック以後、物価が急騰、大会運営を直撃した。選手監督の旅費・宿泊費などを減額、廃止することで対応したが、読売新聞社ほかのスポンサーが補助金を減額ないし打ち切ることにより、大会は資金的に行き詰り、廃止されるに至った。

注及び引用・参考文献

- (1) <http://www.sponichi.co.jp/sports/news/2015/01/05/kiji/K20150105009574631.html> 閲覧日2015年7月15日
- (2) 「三大駅伝に成長」、読売新聞PR版、昭和47年11月（日付なし）
- (3) 日本陸上競技連盟七十年史編集委員会（1995）日本陸上競技連盟七十年史、ベースボールマガジン社、p.148、364
- (4) 東木美憲（1976）「大学能登駅伝大会における記録と土地環境の関係」日本体育学会大会大会号（27）、p.355
- (5) 鈴木仁子（2009）「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会について—第1回開催（1968）から中止（第10回大会・1977）に至るまでの経緯—」、平成21年度金沢大学教育学部卒業論文。筆者（大久保）の指導したこの論文は豊富な資料収集に基づいた好論文である。本稿もこの鈴木仁子論文に負う所が大きい。

- (6) 鈴木仁子インタビュー：第1～6回大会総務宮口尚義氏
平成20年7月17日実施
- (7) 読売新聞，昭和43年11月15日朝刊
- (8) 読売新聞，昭和45年11月21日朝刊
- (9) 読売新聞PR版昭和47年11月号（発行日付なし）
- (10) 山本教人（2005）「駅伝を語る：第51回九州一周駅伝の物語」
体育学研究 50(6)，pp.641-650
- (11) 読売新聞，昭和43年11月16日朝刊
- (12) 読売新聞，昭和43年11月17日朝刊
- (13) 読売新聞，昭和43年11月18日朝刊
- (14) 読売新聞，昭和43年11月18日朝刊
- (15) 人事院「国家公務員の初任給の変遷（行政職俸給表（一））」，
http://www.jinji.go.jp/kyuuyo/kou/starting_salary.pdf#search=%E5%9B%BD%E5%AE%B6%E5%85%AC%E5%8B%99%E5%93%A1%E5%88%9D%E4%BB%BB%E7%B5%A6 2015年7月19日閲覧
- (16) 読売新聞，昭和45年11月15日朝刊
- (17) 読売新聞，昭和45年11月16日朝刊
- (18) (6)に同じ
- (19) 日本新聞協会（1968）『日本新聞年鑑昭和43年』p.188，同『日本新聞年鑑昭和44年』p.195，同『日本新聞年鑑昭和45年』p.166による
- (20) 鈴木仁子インタビュー：第7～10回大会総務東木美憲氏，
平成21年12月18日
- (21) 読売新聞，昭和49年11月21日朝刊
- (22) 読売新聞，昭和49年11月24日朝刊
- (23) 読売新聞，昭和49年11月23日朝刊
- (24) 読売新聞，昭和49年11月24日朝刊
- (25) 読売新聞，昭和49年11月25日朝刊
- (26) 第7回大会「参加費の援助について」
- (27) 第8回大会「参加費の援助について」
- (28) 第9回大会「宿泊申し込み方法について」
- (29) 北信越学生陸上競技連盟・稲置繁男会長名，報知新聞社宛
「後援願」昭和51年11月6日付
- (30) 読売新聞，昭和45年11月15日朝刊
- (31) 読売新聞100年史編集委員会（1976）『読売新聞百年史 [本編]』 pp.835-846

